

## 学部専門科目「環境英語」に対する関心についての事例研究： 履修検討学生向けアンケートの比較分析

Students' Interests for "Environmental English": Comparative Analysis of Questionnaire for  
Prospective Students

太田絵里\*, 櫻井千佳子\*\*, 岡野恵\*\*\*

Eri OTA\*, Chikako SAKURAI\*\*, Megumi OKANO\*\*\*

\*東京工業大学グローバル人材育成推進支援室, \*\*武蔵野大学環境学部,

\*\*\*大正大学表現学部

[要約] 本研究では、学部専門科目である「環境英語」の履修を検討している学生に対し、専門科目の履修における英語力の必要性に対する認識、学習方法、教科に対する関心および期待等に関して、平成 25 年度、26 年度にそれぞれに実施したアンケート結果を比較し、入学年度によって学生の意欲や学習状況、希望に変化があるのかを把握した。比較分析の結果、当該科目履修生の英語能力は向上しており、環境学という教科に関わる上での英語の必要性についての意識も高まっていることがわかった。また、当該科目の履修目的として、英語力の向上、英語の活用という希望、さらに環境問題を世界的な問題として捉え英語により問題を理解した上で専門知識を活用するという希望等に関する認識が向上していた。一方で、当該科目履修生の英語力また学習の向上の為の努力は授業内の活動及びその課題などへの取り組み等、授業との関連に限定され、履修検討者の「環境英語」に対する希望と実際の学習方法に対して大きなギャップが存在することが明らかになった。

[キーワード] 環境英語、環境学、英語力、発信力、学習方法

### 1. はじめに

日本政府は、2000 年代後半より高等教育に焦点を当て、国境を越えて活躍できる人材、すなわちグローバル人材の育成に関連した政策を強化してきた。具体的には、「環境リーダー育成推進事業」、「グローバル人材育成推進事業」等の政策がそれにあたる。これらの政策実施の背景には、環境問題、資源問題、エネルギー問題、食糧問題など地球規模で起こっている世界の課題への対応が挙げられる。これらの政策的社会的ニーズを反映し、武蔵野大学では、環境学部やグローバル・コミュニケーション学部等、現代の社会状況に対応する人材育成を目指す学部を開設している。本人材育成の取組下、武蔵野大学環境学部では、教育カリキュラムの一部として、平成 22 年度より専門科目として「環境英語」科目群を設置している。「環境英語」は英語を活用し

た環境分野の学習の向上を目的とする専門教育と、環境に関わる専門分野の理解を高めるための一環としての英語教育の双方の役割を果たし、段階的なカリキュラムで構成される継続的な科目群である。

環境英語科目群は、英語教育、環境学を専門とする複数の教員が教育目標、教育計画、教育内容、教材、教育手法を検討している。確立された教育内容・手法が存在しない本教科に関して、担当教員らは、これまで試験結果、提出された課題内容、アンケート結果等を通じ、履修生の学習状況や学習への意欲等を把握してきた。これまでの研究結果から、環境英語科目群の継続的な履修者達は、環境分野の学習のツールとしての英語の重要性に対しては本科目群の履修開始時よりも当該科目履修修了時に意識が向上しており、科目群の継続の目的としては、情報収集よりも英語

を活用した意見交換，情報発信というより積極的なコミュニケーション能力を求める傾向が高いことが分かっている（太田他 2014）<sup>i</sup>。一方で，研究結果からは，世界の共通語である英語を活用し環境問題を理解し専門知識を活用したいという希望があり，そのための英語力の必要性については環境英語科目群の履修開始時から継続して認識があるが，学生自身の英語力また学習の向上のための努力については講義に関連したものに限定されており，英語力強化や知識を広げるための努力を授業以外の自学自習として行っていない点が課題として挙げられている（太田他 2013, 2014）<sup>ii</sup>。また，履修生の継続的な科目群の履修については，平成 25 年度に当該必修科目を履修した 59 名の内，35 名が継続して関連の選択必修科目を履修したが，平成 26 年の必修科目履修者 54 名の内，関連選択必修科目の履修者は 19 名と履修継続者は減少傾向にある。

## 2. 研究目的及び方法

そこで本研究では，平成 25 年度および 26 年度に当該科目の履修者に対して行ったアンケート結果を比較分析し，興味対象や学習方法について入学年度の違いにより差があるのか，という点を明らかにすることを目的とする。本研究により，環境英語科目群を継続して履修する学生の意欲やその理由を把握することで，科目群を運営するための教育目標や教育計画策定の参考とし，教育計画実施のための検討材料となることが期待される。

本稿では，まず環境英語科目群についてその構成および教育内容を概説し（3），平成 25 年度および 26 年度に行ったアンケート結果を比較分析する（4）。その後，分析結果をもとに環境英語科目群の教育計画，教育内容，また教育手法のあり方を考察する（5）。

アンケートは，平成 25 年度および 26 年度共に次の通り実施された。配布対象は，環境英語科目群の必修科目である「環境英語入門」

表 1：アンケート質問内容

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. おおよその英語レベルを教えてください。</li> <li>2. 現在興味のある環境問題は何ですか。</li> <li>3. 環境問題を学ぶ上で英語は必要だと思いますか。</li> <li>4. 現在英語をどのように勉強していますか。</li> <li>5. 「環境英語入門」履修にあたり，困難に直面したことはありましたか。その際，どのようにその問題を克服しましたか。</li> <li>6. 「環境英語入門」を履修して関連専門科目である「環境英語」に興味をもちましたか。</li> <li>7. 「環境英語」という科目に興味を持った理由は何ですか。</li> <li>8. 「環境英語」という科目に期待する学習効果は何ですか。</li> <li>9. 「環境英語」という科目の履修は大学在学中にどのような利点があると考えますか。</li> <li>10. 将来，環境問題を英語で理解し，コミュニケーションを図れるようになった場合，将来それをどのように活用したいと思いますか。</li> </ol> |
|--|

を履修し，今後選択必修科目である「環境英語」の科目群の履修を検討している学部 1 年生 59 名（平成 25 年度），54 名（平成 26 年度）である。アンケートでは，学生の英語レベルに関する設問として，語学能力検定試験の結果及び環境問題の興味対象を把握した。その後，環境問題を理解する上での英語の必要性，英語の学習方法，「環境英語」という科目に期待する効果および活用方法に関しての設問を設定した（表 1）。質問 4, 7, 8, 9 は複数回答とした。アンケートの回答時間は 15 分とした。その後，年度ごとのアンケートを集計し，結果について年度間の比較を行った。

## 3. 環境英語科目群の概要

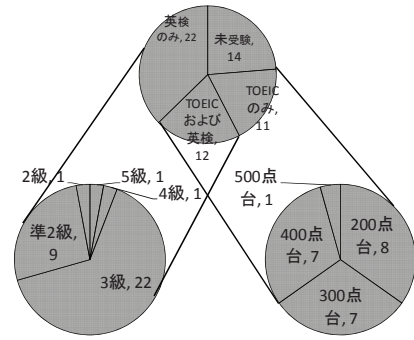
武蔵野大学における環境英語科目は，平成 22 年度に設置された「環境英語入門 1, 2」（1 年生対象必修科目），「環境英語 1, 2」（2 年生対象選択必修科目），平成 23 年度に設置された「環境英語 3, 4」（3, 4 年生対象選択必修科目）の 3 つの通年科目で構成されている。「環境英語入門」は英語レベルに応じて 4 つのクラスに分かれている。「環境英語入門」の目的は，「環境分野に関する英語に身近に触れることによって，環境学をグローバルな視点から

専門的に学び、代表的な環境トピックを英語で理解できるようになること」である<sup>iii</sup>。「環境英語 1,2」は履修生の目的に合わせ、環境問題を題材とし英語力の強化を目的とするベーシッククラス、英語を活用した環境問題の理解の深化を目的としたアドバンスクラスの2クラスに分かれている。その目的は「環境問題の全体像と相互関連性を英語で理解することにより、環境問題について広い視野でクリティカルに考察できるようになる」ことである<sup>iv</sup>。「環境英語,3,4」は1クラスの開講で、その目的は、「国内外の様々な環境問題に関して英語で理解し、関連のテーマについての情報を拡充し、議論することにより、英語による環境分野の情報収集、発信力、コミュニケーション能力を高める」ことである<sup>v</sup>。

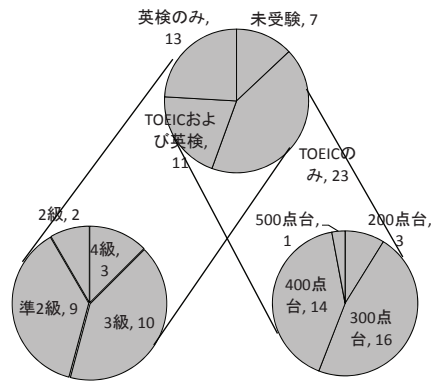
#### 4. アンケート結果

##### 4-1. 英語レベル

履修検討者の英語レベルに関するアンケート結果は、次の通りである。平成25年度は、語学能力検定試験未受験者が14名、英検およびTOEICの双方を受験者が12名、TOEICのみの受験者が11名、英検のみの受験者が22名である。その内訳は、英検5級が1名、4級が1名、3級が22名、準2級が9名、2級が1名、TOEICスコア200点台が8名、300点台が7名、400点台が7名、500点台が1名である。平成26年度は、語学能力検定試験未受験者が7名、英検およびTOEICの双方を受験者が11名、TOEICのみの受験者が23名、英検のみの受験者が13名である。その内訳は、英検4級が3名、3級が10名、準2級が9名、2級が2名、TOEICスコア200点台が3名、300点台が16名、400点台が14名、500点台が1名である。本結果からは、平成25年度と比較して、平成26年度はTOEICの受験生数が増加し、また、TOEICスコア及び英検レベルが向上していることがわかる(図1)。



平成25年度環境英語入門履修生

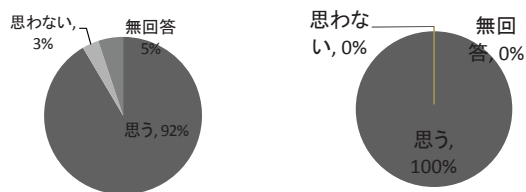


平成26年度環境英語入門履修生

図1: 履修検討者の英語レベル

##### 4-2. 環境問題の関心

履修検討者の関心の高い環境問題は、平成25年度は、地球温暖化(14名)、生物多様性(14名)、エネルギー問題(9名)、水資源問題(9名)であった。その他大気汚染問題、海洋汚染、リサイクル問題等が挙げられた。平成26年度は、地球温暖化(9名)、原発問題(6名)エネルギー問題(10名)、気候・異常気象(5名)、大気汚染問題(6名)、水資源・水質汚染問題(7名)、生物多様性(6名)、その他資源問題、貧困問題、里山の破壊、エコリズム等に関心が向けられた。本結果からは、履修検討者の関心分野は地球環境問題全般にわたるが、平成25年度と比較し26年度は関心分野が多様化していることが理解できる。



平成 25 年度履修生      平成 26 年度履修生

図 2: 質問「環境問題を学ぶ上で英語は必要だと思いますか」に対する回答

### 4-3. 環境問題学習のための英語の必要性に関する認識

環境問題学習のための英語の必要性についての認識の結果は次の通りである。平成 25 年は、9 割以上が英語の必要性について認識しており、平成 26 年度は、全ての学生が必要性について認識していた(図 2)。その理由として、環境問題の国際化に伴う語学の必要性を挙げた学生が平成 25 年度は 33 名、26 年度は 24 名であった。次に広範囲の情報収集を希望する学生が平成 25 年度は 17 名と約 2 割、26 年度は 28 名と半数以上を占めた。また、世界共通語である英語の必要性を挙げた学生が平成 25 年度は 4 名、26 年度は 2 名であった。このことから、平成 26 年度には、より多くの学生が情報収集を目的とした英語の必要性を実感していることが分かった。

### 4-4. 英語の学習方法

英語の学習方法に関しては、平成 25 年度は 9 割弱、26 年度は 9 割以上が講義の履修と回答しており、講義の履修および予習復習は両年度共に約 3 割が行っていた。英会話学校や英語教材の利用等、講義以外の学習を行っている学生は両年共に 1 割約一割であった(図 3)。この結果から学習方法に関しては、両年共に講義の履修に大きく委ねられていることが理解できた。

### 4-5. 講義の課題に関する克服方法

「環境英語入門」を履修し、困難に直面したか、また、その際の克服の方法は、という問

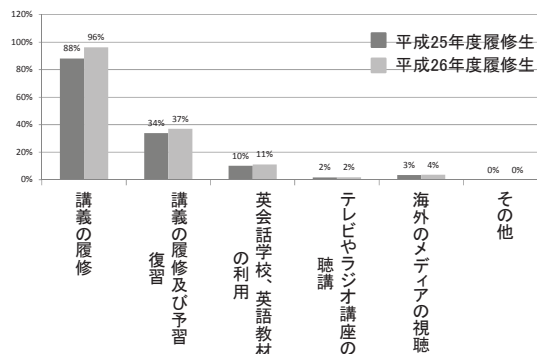
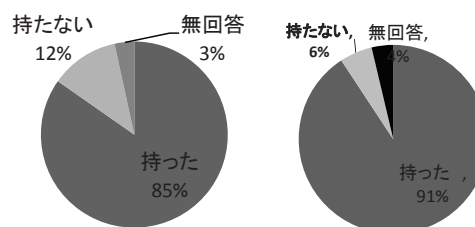


図 3: 質問「現在英語をどのように勉強していますか」に対する回答 (%)

いに対しては、平成 25 年度は 6 名、26 年度は 2 名が単語を調べるために辞書を多く使ったと述べている。また、平成 25 年度は 5 名、26 年度は 7 名がリスニングを繰り返したと述べている。本質問に関しては、平成 25 年度は 35 名、26 年度は 27 名がは無回答、または特になし、とのことであった。

### 4-6. 専門科目である「環境英語」への関心

専門科目である「環境英語」の履修に関しては、平成 25 年度は 8 割以上、26 年度は 9 割以上が興味を示した(図 4)。「環境英語」という科目に興味を持った理由としては、両年共に回答者の半数以上が「環境問題を理解する上で英語のスキルがあったほうがよい」、4 割以上がそれぞれ「国際的な環境問題の理解」、「英語のさらなる上達」と回答している。また、2 割弱が「他国の人々とのコミュニケーション」を求めている(図 5)。本比較結果からは、若干ではあるが、平成 25 年度と比較して平成 26 年度の方がそれぞれの理由に対して高い興味を示していることが分かった。



平成 25 年度履修生      平成 26 年度履修生

図 4: 質問「「環境英語入門」を履修して関連専門科目である「環境英語」に興味をもちましたか」に対する回答



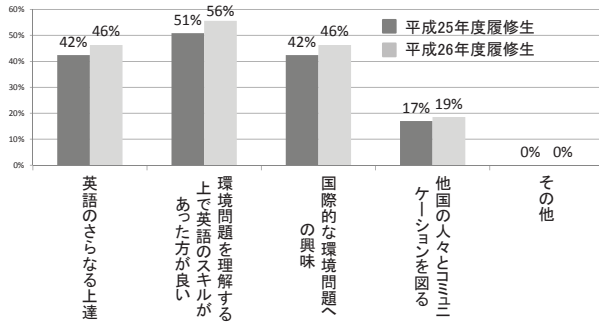


図 5: 質問「「環境英語」という科目に興味を持った理由は何ですか」に対する回答 (%)

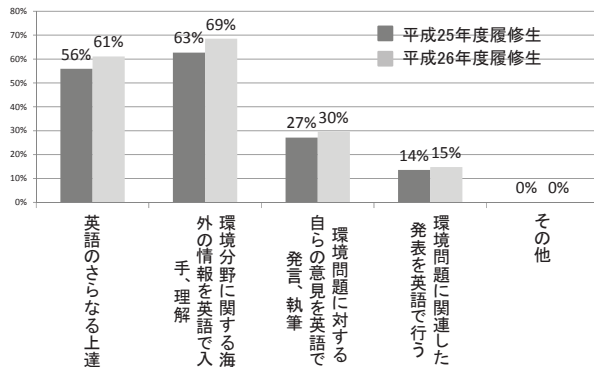


図 6: 質問「「環境英語」という科目に期待する学習効果は何ですか」に対する回答 (%)

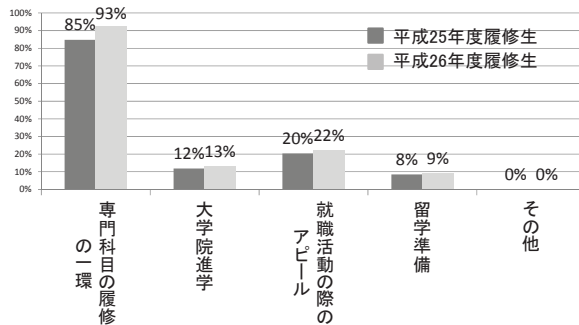


図 7: 質問「環境英語」という科目の履修は大学在学中にどのような利点があると考えますか」に対する回答

#### 4-7. 「環境英語」に科目に期待する学習効果

環境英語に期待する効果に関しては、「環境分野に関する海外の英語で入手、理解」が両年共に6割以上を占めており、続いて半分以上が「英語のさらなる上達」を求めている。また、「環境問題に対する自らの意見を英語で発言、執筆」、「環境問題に関連した発表を英語で行う」は、平成25年、26年それぞれ約3割、1割が希望している(図6)。本項目に関しても、平成25年度より平成26年度の学生の

方がそれぞれの理由に高い関心を示す結果となった。

#### 4-8. 「環境英語」という科目の活用方法

学部における「環境英語」という科目の活用方法に関しては、「専門科目の履修の一環」と回答した学生が平成25年度は全体の8割、26年は9割以上を占め、両年共に「就職活動の際のアピール」が2割、「大学院進学」が1割、「留学準備」が1割弱であった(図7)。

#### 4-9. 効果習得後の活用方法

環境問題を英語で理解し、活用するようになるという当該科目の目的が達成された際には、他国の人々との意見交換を求めている学生が平成25年度は22名、26年度は23名であった。次に多い希望としては海外の情報収集であり、平成25年度は10名、26年度は14名の学生が希望している。また、情報の発信をめざす学生が両年共に3名存在した。

#### 4-10. まとめ

アンケート結果の比較から入学年度による興味対象、環境英語科目群に対する継続意欲、継続理由、学習方法、科目に対する期待の違いについて、次のようにまとめる。

第一に、平成26年度の環境英語入門の履修生は25年度と比較して英語の語学レベルは上昇傾向にある。第二に、環境英語履修検討者の興味の対象は、地球温暖化、エネルギー問題、汚染問題、生物多様性等グローバルな環境問題に関心が高く、26年度の履修検討者はこれらに加えて原発問題、異常気象等に関心が高く25年度と比較して興味が多様化している。第三に、世界的な課題である環境問題を理解する上で英語が必要であるという点については平成26年度の環境英語履修検討者の意識の方が高い。第四に、英語の学習は講義の履修に依存している学生の比率が平成26年度に高い。第五に、「環境英語」に期待

する学習効果に関しては、英語力の向上、環境問題を理解するための英語スキルの取得、国際的な環境問題への関心、英語を活用した発信等すべて平成25年度と比較して26年度の履修検討性の関心が高い。第六に、当該科目の履修目的は平成25年度と比較し、26年度の履修検討性が専門科目の履修の一環、大学院進学、就職の際のアピールのすべてにおいて高い。第七に、両年の履修検討生のいずれも「環境英語」という科目の活用方法として、意見交換、情報発信等を希望している。

以上のことから、平成25年度と比較し26年度入学の環境英語入門履修生の英語能力は向上しており、環境学という教科に関わる上での英語の必要性についての意識も高まっていることがわかった。また、環境英語を履修する目的としては、英語力の向上、英語の活用という希望、さらに環境問題を世界的な問題として捉え世界の共通語である英語により問題を理解した上で専門知識を活用するという希望、またそのための英語力の必要性に関する認識は全て平成25年度と比較し26年度入学の学生が向上していた。一方で、平成26年度入学の当該科目履修生の英語力また学習の向上のための努力は講義に関連したものにより依存しており、履修検討者の「環境英語」に対する希望と実際の学習方法に対して大きなギャップが存在することが明らかになった。

## 5. 考察

環境英語科目群の継続的な履修を希望する学生の英語を修得した上で環境学の理解に必要な情報収集、情報発信、意見交換等を行うという希望は年々上昇傾向にあり、そのための語学力も向上している。また、履修希望者は英語を活用することの重要性に対して高い認識がある。環境英語科目群の選択必修科目である「環境英語1,2」は、英語力の強化を希望する場合、環境問題の理解の深化を希望する場合でクラスをレベル分けしており、履

修生の目的達成のための適切な教育プログラムを提供していると言える。また、本科目群の最後に位置づけられている「環境英語3,4」は、ディスカッション、レポートの執筆方法、発表方法の教授も学習内容に含まれており、英語を活用した意見交換、発信等履修希望者の目的に対応する適切なカリキュラムが構成されている。また、環境英語科目群では全て地球温暖化問題、エネルギー問題等グローバルな環境問題を扱っており、本点においても履修希望者の興味対象と一致している。このため、環境英語科目群の科目構成および目標設定については履修希望や目的に沿った形で適切に行われていると言える。しかしながら、履修学生たちは、当該科目の目的を達成するための学習を十分に行っておらず、このため、英語力向上のための継続的な努力が不足であると考えられる。本科目群に対する履修生の意識に反し、履修者数が減少傾向にある理由としては、一学期の科目履修数に制限を掛けるキャップ制の影響が挙げられるが、その他、学習意欲が実行に結び付かない理由についても今後検討する必要がある。環境問題を理解するためには語学力の向上を含み多岐にわたる学習が必要である。このため、授業をきっかけとして学生自身の英語学習や講義テーマに関しての学習意欲が高まり、講義以外で自学自習の中で学びを広げ継続する努力を行うような仕掛けづくりや動機づけ、適切な課題を与える等の取組を継続する必要がある。

<sup>i</sup>太田絵里, 櫻井千佳子, 吉村スーザン, 岡野恵(2013) “学部専門科目「環境英語」に対する期待と課題：履修検討学生向けアンケートの分析, 日本環境教育学会第7回関東支部年報, 日本環境教育学会, 13-18.

<sup>ii</sup>太田絵里, 櫻井千佳子, 吉村スーザン, 岡野恵(2014) “学部専門科目「環境英語3,4」に対する学習の意欲：「環境英語1,2」履修生向けアンケートの分析, 日本環境教育学会第8回関東支部年報, 日本環境教育学会.

<sup>iii</sup>学校法人武蔵野大学(2014年1月16日閲覧)

<sup>iv</sup>学校法人武蔵野大学(2014年1月16日閲覧)

<sup>v</sup>学校法人武蔵野大学(2014年1月16日閲覧)